

レポーター：こちらの作品はどういったものになるんですか。

学芸員：どういった作品だと思いますか。

レポーター：いや。像。笛をふいた女性の像。当たりですか。

学芸員：するどい。

レポーター：見たままなんですけども。

学芸員：でもね、実はこれ笛を吹いた女性の像と言ったんですけど、女性じゃ多分ないんですね。

レポーター：あー、そうですよね。男性。でも、すごい指のラインとかは女性的ですよ。

学芸員：ん〜ん、なるほど。

レポーター：えええ。

学芸員：これは実は男性なんですけど。女性と思った理由は指のラインですか。

レポーター：指のラインと表情とかすごく穏やかだし、あと像自体がつるんとしていて、繊細なイメージを受けたんですよね。

学芸員：するどい。

レポーター：は、ありがとうございます。

学芸員：あはははは。

レポーター：ははは。

学芸員：はい、実は、それなんか言われたのが、なんかその僕もその初めて見たときにひょっとしたら女性かなと思ったんですけど、実はこれは男性、というか少年というか、若いですよ。だから、まだ中性的な見た目なんです。あとですね、そのもう一つ理由があるんですけど、実はこれ今から 60 年ほど前に、タイで作られた彫刻なんです。で、その時これを、実際これは笛を吹いている少年の像なんですけども、作った人は実はタイの仏像というの、一応何ていうか、作るときの参考にしたんですよ。仏像といえば、基本的にお釈迦様とかでも、なんか阿弥陀如来にあったとしても、なんか男性、女性というのがわかりにくいすごく中性的な、ですよ。柔らかくて、優しくってというのが実はここはかなり入っている。だから、ちょっとその女性ってはじめ言われたのは、すごくなんかある意味、的を得ている感想だったんですね。

レポーター：じゃあ、見る人によっては、ちゃんと少年って見える人もいれば、私のように女性って感じる、第一印象って人によってそれぞれ違いますよね。確かに私たちの馴染みのある仏像をイメージしているので、なんか親近感というか、より近いような印象を受けました。

学芸員：なんかこうね、イヤリングって言うんですかね、してたりとか、だけど、このファンキーな髪型はあんまり女性はしないですね。ほんとは実は僕、昨日髪の毛

切ったんですけど、このぐらいほんとはしたかったんですけど、勇気がなくてできませんでした。

レポーター：いつかは是非してみてください。

学芸員：ここね、ほんとにね、触ってはいけませんよ。でも、この頭の触りたいぐらいの、この丸みというか形がいいんですよ。

レポーター：しなやかですもんね。

学芸員：しなやかですよ。

レポーター：触っちゃダメですよ。思わず触りたくなるような、綺麗さがありますよね。

学芸員：これほんとは、今壁につけて安全上のために展示してるんですけど、本来だったらこれは、実は、360度見てもらった方がいい作品なんです。

レポーター：えー

学芸員：で、これつまり、なんかこうどこが正面向いてるかわからない。体をこうねじらせていますよね。それによって、ねじる事によって、ここの頭のこのテカテカしたところから首筋、肩、腰、足というように、類曲線が流れるように走ってるわけなんです。それをほんとはぐるっと、見てもらいたいんですよ。

レポーター：この少年の後ろ姿も今は想像する事しかできませんけど、見てみたいです。実際、どういった方が作られた作品なんですか。

学芸員：これはですね、タイの近代美術の彫刻分野においては特に第一人者的な方です。で、先ほどタイの仏像を参考にして作ったと言ったんですけども、実はその時は、まだあんまりタイでは近代的な彫刻作りというのがされてなかった。それで、先生をイタリアから呼んできて、イタリアの彫刻の先生のもとにタイの美大生が、作品作りを学んだんです。

レポーター：へえー、作品を見て、どこかイタリア的要素なのが含まれているんですか。

学芸員：それがですね、あんまりない。ただ、イタリア西洋の彫刻はきちんと体のプロポーションをちゃんととって、作るんですよ。なので、すごく流曲線があって、仏像を元にはしているとはいえ、人の体はかなり写実的なこうプロポーションになっています。そこがすごく上手いんですよ。西洋的なプロポーションと写実的なプロポーションと仏像的な優しさというのをこうミックスさせて。はい。ということですよ。すごく貴重な作品なんです。

レポーター：いいところがきゅっと集まったほんとに美しい、ブロンズ像なんですよ。

学芸員：ただこれは僕がこの美術館、所蔵品の中でも1番か2番か、3番くらいに好きな作品の一つなんですけど、その好きな理由ですね、ただ綺麗なだけではないんです。よく見て頂くと、これは先ほども言われたみたいに、笛を吹いている時なん

ですけど、ただどんな風に吹いているのかなって、ちょっと想像してもらいたいですけども、実はね、その時によく見て頂きたいのが口元です。クッとあがった口元。そして、もう一つ見て頂きたいのは足の指ですね。指先。

レポーター：特徴的なんですね。ぴよんと。

学芸員：なってますよね。特に、このこっち側の足ですけど、こんな足の形になるっていうのはどういう時だと思いますか。

レポーター：緊張している時。

学芸員：そう。そうですね。緊張している時なんですね。つまり、力を入れている瞬間なんですよ。ということは、この人は、まったくと笛を吹いているんじゃないんじゃないかな。ふっとう、息を吐き出す瞬間というのが実はここに、まあ描写されている。

レポーター：はあーあつ。ふっかいですね。

学芸員：深いですね。よく見るとですね、こういうところも見えてくるんです。だからこれは、すごく優しい作品なんですけど、どっかピンとアルデンテ的にちょっと筋が通った、作品じゃないかなと思います。

レポーター：はあーあつ。ほんとにやっぱりじっくり見ないと美術のほんとに細かいところってわからないものなんですね。

学芸員：そうですね。

レポーター：わあ、なんか最初の印象とお話を聞いてからの印象と、まったく変わってきました。

学芸員：ここはちょっと隠された口元と足の指先がポイントです。

レポーター：そうなんですね。ありがとうございました。

学芸員：いえいえ。